



葛藤が子どもを育てる

校長 富田 操

全校遠足が終わり、2年ぶりに水泳学習が始まります。いよいよ夏が本格的に始まる気配がしてきました。ほんの10年前くらいには、これほどの問題になっていなかったように思いますが、今は暑くなるとまず熱中症が心配されます。

過日、保護者向けのお知らせのプリントを配布しましたが、朝会でも、子どもたちに「登下校中は、暑いな、苦しいなと感じたらマスクを外しても良いです。その代わり、外したら友だちと大きな声でおしゃべりはしないようにしましょう。」という話をしました。しかし、朝、門で迎えるときに見てもほとんどの子どもは、マスクをして登校しています。子どもにすれば、どっちなんだ!と思うところもあると思いますが、“今は”熱中症の方が危険性が高いということを、子どもたちに粘り強く伝えていきたいと思えます。

さて、私たちは、学校の授業で子どもたちが話し合いをするとき、「AかBか」というように論点を明確に分かりやすくして討論をさせます。その場合、AもBもどちらも正しいように思える、または、どちらと決めるのが難しいというもののほど、議論は伯仲します。また、AもBも同等の価値があると子どもが考える場合にも議論が深まります。

私たちが、子どもたちに授業の中で話し合いをさせるのは、子どもの中で「葛藤」を起こしたいからです。「どちらが正しいのだろう?」「どちらが意味があるのだろう?」と考え悩み、葛藤することで、学びが深まり、子どもの成長につながると考えているのです。

生活の中でも、子どもたちが葛藤する場面はたくさんあります。むしろ日々が葛藤の連続だと言って良いかもしれません。葛藤は、人にとってあまり心地よいものではありません。「やってみたいけど、やれない・・・。」「言ってみたいけど、言えない・・・。」「良いことだと思うけど勇気が出ない。」「駄目だと思っているけど、止められない。」

しかし、そうした葛藤が生まれる時こそ、子どもたちは、自分のことを深く真剣に見つめます。

「自分は何をしたいのか?」「自分は どう考えるのか?」

そして、その時、子どもは爆発的に成長します。子どもの中で起きる迷いや苦しさは、決して子どもにとってマイナスのものばかりではなく、子どもの成長に欠かせないものでもあります。

私たち大人は、子どもを心配するあまり、先手先手をうって、その葛藤を排除しようとしてしまうことがあります。もちろん葛藤には、大きすぎて子どもの手に余るものもあります。そんな時は、しっかりと手助けをすることが必要なことは言うまでもありません。しかし、それ以外のものまで手助けをしすぎて、実は、子どもが成長するチャンスの芽を摘んでしまっているということがあるかもしれません。

子どもを信じて、その葛藤を見届け、子ども自身が結論を出すのを待つ。これは覚悟のいることですが、子どもはその信頼をするに足る存在だと思います。そして、学校と家庭や地域が一体になって、子どもの葛藤と一緒に見守り、子ども自身が答えを出すのを一緒に待つことができるとすれば学校として、こんなに心強いことはありません。

子どもが、「最後は大人たちが守ってくれるに違いない」と思いながら、十分に悩み、葛藤でき、そして、着実に成長していく。そんな風に子どもを支えていければと思います。

猛暑の予感のする7月、どうか今月もご支援くださいますようお願いいたします。